

内科医の私と患者さんの物語 血液診療のサイエンスとアート

岡田 定(著)

宮崎医院院長

宮崎 仁

臨床の入口に立つ 若い医療者に読んでいただきたい

「物語能力(narrative competence)」は、臨床に携わる医師や看護師にとって大切なものです。しかし、どうしたらその能力を身につけることができるのかは、誰も教えてくれませんでした。

物語能力とは、「患者の病気の背後に隠れた物語(ナラティブ)を感受し、その物語に心を動かされて、患者のために何かをなすような関係を作っていくための能力」であると、ナラティブ・メディスンの提唱者であるリタ・シャロンは定義しています。

医学部や看護学部の講義室で、このような能力を伝授するための教育を行うことは極めて困難です。そもそも、物語能力に長けた医学部の教官はごく少数しかいません。ですから、「誰も教えてくれない」というよりも、「誰もうまく教えることができない」というのが真相です。

本書に収載された27編の医師と患者を巡る物語を読み終えて、「これは物語能力を身につけ、磨くための教科書になる」と、わたしは直感しました。

冒頭の「アウエル小体」と題された章では、「アウエル小体のある芽球がいます」という検査技師からの電話で物語は始まります。患者さんは妊娠26週であり、妊婦健診の採血で偶然に急性骨髄性白血病が発見されたまれなケースです。白血病の治療はどうするのか、子供は助けられるのかという難問を解決するために、著者が率いる医療チームの苦闘が始まります。そして、無事に女児を出産し、その後白血病も寛解から治癒に至ります。最後に、その赤ちゃんは、成人して看護師になったという後日談が語られ、20数年にわたる物語は終わります。

「結婚後10年目の39歳にして初めて妊娠し、挙児を切望している」という、白血病患者さんの物語を医師が察知し、心を動かされ、患者さんのために何をなしたか、言い換えると「物語能力の実際の使い方」が、この文章を読むと実によくわかります。また、「胎児が母親に白血病を知らせた?」「赤ちゃんがお母さんに生きる力を与えた?」という、著者による物語的な見立ての開示と振り返りも、(医学の枠に収まらないけれど)納得できました。

さらに、本書には「うまくいった話」だけでなく、「うまくいかなかった話」もたくさん入っています。俗に「苦いカルテ」と呼ばれる、自らの失敗談を披露することは、医師として大変勇気のいることです。しかし、本書では「苦いカルテ」の物語を振り返ることで、痛みを感じながらも、医師としての自己洞察を深めていく過程が正直に書かれています。

著者が高い物語能力を発揮できたのは、難病ばかりを扱う血液内科の特性と、物語の舞台である聖路加国際病院が持つ、「特別な場の力」も大いに影響していると思います。

「あなたを心の底から支えてくれるのは、『患者さんの物語』から学んだ『あなたの物語』だ」と語る著者をお手本にすれば、伝授することが難しい物語能力を、身につけ磨くことができるでしょう。特に臨床の入口に立つ若い医師や看護師に読んでいただきたい本です。

●A5/頁168/2021年
定価:本体2,500円+税
[ISBN978-4-260-04348-9]
医学書院 刊